

No.43/2026

図書館文化史研究

日本図書館文化史研究会

●特別講演●

小津桂窓と西荘文庫

菱岡 憲司 1

●論文●

藤原文庫の歴史とその蔵書構成

高橋 努 29

●書評●

松井健人著『大正教養主義の成立と末路：
近代日本の教養幻想』

今野 創祐 63

汐崎順子著『子どもと本をつなぐ：子ども文庫と私立図書館』

川又 理奈 71

川崎良孝著『図書館における成人教育サービスの形成、確立、
限界：アメリカ図書館協会、読書案内サービスを中心として』

今井 福司 83

●資料紹介●

『司書教諭養成指導者研究集会参加者意見集』

今野創祐，岡田大輔 91

●随想●

日本目録規則は衰退の運命をたどるのか

早坂 信子 103

ISSN 1342-6761 日外アソシエーツ発行

[特別講演]

小津桂窓と西莊文庫

日本図書館文化史研究会 2025 年度研究集会

2025 年 9 月 6 日 山口県立山口図書館

ひしおか けんじ
菱岡 憲司

(山口県立大学)

ただいま、ご紹介に預かりました山口県立大学の菱岡憲司です。今日はどうぞよろしくお願いいたします。私は日本近世文学を専門としておりますが、同僚の仲村拓真先生にお声がけいただきまして、日本図書館文化史研究会という、専門外の専門家の方々に話を聞いていただく機会を得ましたので、いろいろな意見を交わし、教えていただけることを楽しみにしておりました。しかし今日、会場に参りましたら、存じ上げている近世文学の専門家の方がいらっしやいまして、これは聞いていた話と違うぞ、といささか焦りながらも、それはそれで勉強するよい機会にしたいと思います。本日は「小津桂窓と西莊文庫」と題して講演いたします。

まず、小津桂窓といいましてもご存じない方も多くいらっしゃると思いますので、どのような人物なのかを最初にお伝えいたします。つづいて今回、桂窓の蒐集した西莊文庫を取りあげますので、その蒐集の実態をお話しし、最後に、文人ネットワークと伊勢文化圏について言及できればと思っています。

私は 2023 年に著書『大才子 小津久足』¹⁾ を刊行いたしまして、小津久足^{ひさたり}の 4 つの顔という趣向で本を作りました。ご存知のように、近代以前は一人の人間が複数の名前を持つのは当然のことでしたので、それぞれの名前に由来する営みを軸に書いた本となります。こちらの枠組みを用いながら、小津桂窓はどういう人物なのかを最初に紹介したいと思います。

幼名安吉、名久足、一般的には小津桂窓という名称の方が有名なのですが、私には久足の営み、とくに紀行文や和歌等に焦点を当てたいと思いましたので、実名の小津久足を題名に冠しました。蒐書としては、西莊文庫の主としての桂窓が有名です。そして与右衛門が商売上の通称になりまして、その他、別号に雑学庵がございます。

伊勢松坂の人として、江戸店持ち。松坂商人、ひいては伊勢商人は、基本的に地元の本宅を構えまして、商売は他国商い、とくに江戸に店を持ち、それを江戸店持ちといいます。よって普段は地元、桂窓の場合は松坂におりますので、商売は江戸店にいる支配人を筆頭とした奉公人がおこなっております。例が適切かどうかわかりませんが、オーナー株主と雇われ経営者のような関係といったらいでしょうか。経営の実権はきちんと小津家が握っているが、仕事は経営者に類するような支配人たちが普段は執り

おこなっている。しかし、要所要所でオーナーが目を光らせている関係が、比較的、似ているといえます。ですので桂窓は、普段は松坂にしながら、経営の監督のため、折に触れて江戸に赴いています。そして、頻繁に京にも赴くというライフスタイルを生涯続けた人物でした。じつはこのことが蔵書形成に深く関係しておりまして、そのことはのちに触れたいと思います。

こちらが小津桂窓の肖像画(図1)でして、幸い私が手に入れることができたものです。小津家にも確認していただきまして、間違いないことがわかっております。



図1 小津桂窓(久足)肖像 架蔵

1. 小津桂窓について

湯浅屋与右衛門

そして、湯浅屋与右衛門というのが商売上の名前になります。小津桂窓は湯浅屋の六代目の主人として、商売上では代々、湯浅屋与右衛門を称しております。²⁾ 生業は干鰯問屋、これは肥料問屋です。小津与右衛門家は、当初、新兵衛を名乗っておりましたので、小津新兵衛家ともいいますが、その初代から数えて六代目が、今回とりあげる桂窓と呼ばれる小津久足で

す。もともと、通称は新蔵でしたが、天保14年に与右衛門に変わっております。

桂窓の次の代が養子の七代・克孝^{よしとか}です。以後、八代、九代と続いていくのですが、この九代の息子は二人おりまして、長男・良夫は銀行員です。次男の小津次郎は東京大学で教鞭を執った学者で、定年退官後は明星大学でも教えました。いまでも岩波文庫で現役の訳が残っており³⁾、日本シェイクスピア協会の会長もつとめた人物です。

小津家にはこういう話が残っています。小津家にはたいへんな蔵書があり、のちに述べるようにそれは段階的に散逸してしまうのですが、円山応挙の軸をたくさん持っていたことでも知られており、実際、応挙軸を350点は所蔵していたことが確認できています。そして、この小津次郎のことを、父の九代目与右衛門はとても可愛がっていたので、小津次郎が英文学研究を志し、イギリスに留学することになったときに、その応挙の画を売って留学費用に代え、そして洋書を、いくらでも買いなさい、とバンバン買わせたそうです。そのお陰で小津次郎の学問ができあがったわけですが。蔵書や画は散逸しても、それが学問にかたちを変えて小津家に残ったのというは、とても興味深い話です。これは現在の当主の方からうかがった、小津家に伝わっている話です。

そして、小津とってまず思い浮かべるのは、小津安二郎ではないかと思えます。小津与右衛門家に近い分家として小津新七家がございまして、与右衛門家からすれば、肉親といえる婚姻関係にある分家です。本日の主人公である桂窓との関係をいいますと、桂窓の父にあたる人物(徒好^{ともよし})は、妻すなわち桂窓の母(ひな)に先立たれたのですが、一方、小津新七家には夫を亡くした女性⁴⁾がいて、それぞれ妻を亡くしたと夫と、夫を亡くした妻同士が再婚して、小津新七家を継ぎました。そして二人のあいだに子どもが生まれました。つまり桂窓から見ると、異母弟にあたるのが小津新七家の五代目の猪蔵^{いそう}でして、この猪蔵の子どもが寅之助、その寅之助の長男が新一、これは銀行員です。そして寅之助の次男が映画監督の小津安二郎になります。すなわち、父親を通じて小津桂窓と小津安二郎は血が通っているわけです。

そういう目で見てみますと、いかがでしょう、似ていませんか。面長な顔、鼻の感じ。私は肖像画を手に入れたときに、びっくりするくらい似ているな、と思いました。小津監督は柔道をやっていたこともあり、体格がよかったという話も残っております。そして桂窓の方も、その紀行文を読んでいたら、夜具から足がはみ出してしまう、と愚痴をいっているのに対して、供の男が、

編集後記

2025年9月に山口にて2025年度研究集会がオンライン配信を併用して開催されました。菱岡憲司氏の特別講演はその成果です。今号はそれに加えて論文1本、書評3本、資料紹介1本、随想1本を掲載しています。随想はかつて本誌第28号(2011年)に設けた欄で「その範囲は確固としたものではありませんが、論文や研究ノートと色合いの異なるものの図書館史をめぐる文章を掲載する場として打ち出して」(編集後記)いました。

次号以降も引き続き、会員のみなさまには研究発表の成果をご投稿していただきたく願いたします。

最後になりましたが、刊行についてかわらぬご尽力をいただいている日外アソシエーツ(株)編集部のみなさまに、お礼を申し上げます。

2026年7月31日

泉山靖人(東北学院大学)
新藤 透(國學院大學)
鈴木宏宗(国立国会図書館)
三浦太郎(明治大学)
横山道子(神奈川県立深沢高等学校)

編集委員 50音順

図書館文化史研究 (年刊)

第43号 2026年9月25日発行

編集 ©日本図書館文化史研究会 〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1
明治大学司書・司書教諭課程

発行 日外アソシエーツ株式会社 〒140-0013 東京都品川区南大井 6-16-16

電話 03 (3763) 5241 (代)

印刷・製本 株式会社平河工業社

鈴木ビル大森アネックス

表紙デザイン 津田ミナ子

ISBN 978-4-8169-3118-5